

VU (絶滅危惧Ⅱ類)

タカ目 ハヤブサ科

ハヤブサ

Falco peregrinus japonensis Gmelin, 1788

英名: [Peregrine falcon]

カテゴリー判定基準: D

旧レッドリストカテゴリー		
1991	1998	2007
V	VU	VU

北海道から九州まで留鳥として生息するほか、ロシア極東、朝鮮半島、中国南東部にかけて分布する。国内では主に海岸や河川流域などの開けた環境にある断崖や岩場で営巣し、中・小型の鳥類を空中で捕食する。1950～70年代に有機塩素系農薬の影響で激減した可能性があるが、個体数は回復してきていると思われる。営巣地の崖と障害物のない開けた採餌場所の確保や、中・小型鳥類の保全に留意すれば、個体群の安定が図れるであろう。

Falco peregrinus japonensis is a large falcon, which breeds on ledges and in clefts of rocky cliffs, especially those around the coasts north of Kyushu. It is a highly active aerial hunter preying on small-to medium-sized birds. The return of this subspecies to some of its traditional breeding sites starting during the late 1980s suggests that it also declined sharply due to organochlorine pesticides such as DDT during the 1950s and 1960s, but that it has been gradually recovering. There is a good chance that it will maintain a stable population, if appropriate attention is paid to its conservation.

基礎情報

■**形態** 全長はオスが38～44cm、メスが46～51cm、翼長はオスが32～33cm、メスが36～37cmで、雌雄のサイズに大きな差が見られる。成鳥は雌雄ともに上面は青灰色、下面は白または生成り色で、黒い横斑がある。一方、幼鳥は上面は褐色、下面は薄茶色で、太い褐色の縦斑が目立つ。目の下の頬にはハヤブサの特徴を示す、所謂「ハヤブサヒゲ」があるが、幼鳥のヒゲは褐色で、成鳥の黒色に近いヒゲほどコントラストは強くない。目の周りの露出部、嘴の付根の蠟膜、足は成鳥は濃い黄色だが、幼鳥は青味がかかった灰色である。翼は細長く、先端が尖っているので、飛翔時には、成鳥・幼鳥ともに体色や大きさが似通っているオオタカ (*Accipiter gentilis*) との識別点になる。

■**分布域** 種ハヤブサ (*Falco peregrinus*) は南極大陸や一部の島嶼 (ニュージーランドやアイスランドなど) を除き、全世界に分布する。本亜種は国内は北海道から九州まで留鳥として

生息するほか、ロシア極東、朝鮮半島、中国南東部にかけて分布する。

■**生息環境** 主に海岸や河川流域などの開けた環境にある断崖や岩場に生息するが、冬期には越冬個体などが中・小型の鳥類が集まる河口や河川流域、湖沼付近を狩場として高頻度で利用する。

■**生活史** 一夫一妻制で、生息に適した場所に通年、縄張りを占有し、2月頃から求愛飛行などの繁殖行動を始める。3～4月に縄張り内の断崖や岩場のオーバーハングした岩棚や穴に、巣を造らずに直に3～4個の卵を産む。抱卵は主にメスが担当し、雛は5週間程度で孵化するが、孵化後しばらくの間は体温調節ができないために、2週間ほどはメスが引き続き抱雛する。6週間前後で巣立ちを迎えるが、巣立った後も、2ヶ月ほどは親の縄張り内に留まり、独り立ちできるまでは親から給餌を受ける。中・小型の鳥類を高速で飛行して捕食するので、障害物のない開けた採餌空間と、営巣場所として捕食者が近

づき難い断崖や岩場が生息に不可欠である。こうした生息条件を満たす環境は極めて限られているので、個体数や生息密度は低い。

現在の生息状況

■**分布域の現況** 分布域に大きな変動は見られないが、近年、個体数の回復に伴い、これまで生息が確認されていなかった地域で、個体の目撃や生息事例が増えている。都市部への進出事例も少数見られる。

■**生息地の現況** 本亜種の生息条件を満たす環境はもともと限られているが、道路や漁港建設などに伴う落石防止措置等やレジャー活動（ロッククライミング、ハンググライダー、釣り、野鳥の写真撮影など）により、営巣可能な崖や岩場が利用できなくなっている地域がある。

■**個体数の現況** 種ハヤブサは1950～70年代にDDTなどの有機塩素系農薬により世界的に個体数が激減した。日本では本亜種の農薬汚染や個体数の変動に関する調査が行われていないので、詳細は不明だが、1951年に水田で死亡していた個体が採集されており（千葉県小岩）、本亜種も減少していた可能性は高い。しかし、2000年代に入り、これまで生息や繁殖が確認されていなかった地域で、個体の目撃や生息の事例が増えていることから、個体数は回復してきていると思われる。

存続を脅かす要因

河川開発（13）、海岸開発（14）、道路建設（24）、レジャー活動（ロッククライミング、ハンググライダー、釣り、野鳥の写真撮影など）（71）による営巣地の消失や生息・繁殖の妨害、また、湿地開発（15-1）、草地開発（16）、送電線や風

力発電施設の建設（71）による採餌条件の悪化は、本亜種に悪影響を及ぼす。さらに、鳥インフルエンザに感染していた事例も報告されており、感染症（33）の影響も懸念される。

保護対策の現状

種の保存法に基づく国内希少野生動植物種。

特記事項

個体数は回復してきていると思われるが、生息条件を満たす環境がもともと限られているので、それほど大きな個体数の増加は期待できない。一方、食物連鎖の頂点に立ち、環境変化の影響を受けやすい存在なので、長期に渡るモニタリングを行えば、環境の健全さを示す指標としての役割を担える。

なお、日本鳥類目録改訂第7版（日本鳥学会2012）において、本亜種の分類はハヤブサ目に変更されているが、本書では先に公表された第4次レッドリストとの対応を図るため第6版に準拠した。

参考文献

- 青森県自然保護課, 2011. 高病原性鳥インフルエンザウィルスに対し感染リスクの高い種 表-3リスク種. <http://www.pref.aomori.lg.jp/nature/nature/tori-infuruenza-jouhou.html> 2012/10/10 アクセス
- Cade, T. J., J. H. Enderson, C. G. Thelander and C. M. White(eds.), 1988. Peregrine Falcon Population. pp.949. The Peregrine Fund, Inc. Boise, Idaho.
- 泉大津ハヤブサ・サポート倶楽部, 2006. 泉大津ハヤブサ・レポート2006, p. 40. 泉大津市.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男, 1995. 図鑑日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京. 631pp.
- 日本鳥類目録編集委員会, 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広. 345pp.
- 日本野鳥の会, 1996. 平成7年度希少野生動植物種生息状況調査報告書, pp. 89. 環境庁, 東京.
- Sielicki, J. and T. Mizera(eds.), 2009. Peregrine Falcon Population. pp. 800. Turul Robert Zmuda, Warszawa, Poland.

執筆者：黒沢隆（日本オオタカネットワーク）・金井裕（公益財団法人日本野鳥の会）